

国語部の挑戦

「単元評価テスト作りを通して、授業改善を図る」

大阪市立長吉六反小学校

教頭 高岸 章郎

はじめに

大阪市小学校教育研究会国語部並びに大阪市小学校国語教育研究会（以下、国語部と記す）は、平成27年度を迎えるにあたり新たな試みを行った。単元評価テストの作成である。今回は、「単元評価テスト作成に至る経緯や経過、活用などを通して、授業改善を図りたい」という国語部の考えを、大阪市の教職員のみなさまや学校関係者のみなさまに知っていただきたいと考え、この文章を書くことにした。

1. 教科書採択方法の変更

平成28年度より、従来の教科書の採択方法が変わった。それまでは、大阪市を8つのブロックに分け、採択を行っていた。大阪市全体で8つも採択ブロックがあったので、国語の教科書は、多い時で4社、少ない時で2社採択されていた。教科書により扱う教材が全く違うので、国語部で評価問題を作成するにしても、教科書会社ごとに問題を作成する必要があり、単元評価テストを作成することはたいへん困難なことであった。

教えるべき内容が、教科書によってあまり左右されることの少ない算数部や理科部、社会部では、各研究部で評価テストを作成し、配布していただくことがあり、現場の人間にとっては、たいへん役にたつものである。

国語部の中でも評価テストを作ることのよさを感じていても、評価テストを作成しようと言い出す者はいなかった。2月に大阪市全体で活用いただいている「しんだんテスト」を各学年でそれぞれ25問つくるだけでも、

国語部の半数ぐらいのメンバーがほぼ一年がかりで取り組んでいる現状があり、各社に合わせて評価テストを作ることなど、なかなかできるものではないということを誰もが知っていたからである。

しかし、平成27年度から、東京書籍1社の教科書採択になった。仮に1社分の評価テストを作成することができると、全市で活用できることになる。

（ただし、学習指導要領の指導内容が2学年ずつ示されているという関係で、平成27年度は、従来使っている教科書を2、4、6年生はそのまま使うことになる。）

そこで、国語部の有志の力を借りて今までにない新しい形式の診断テストを国語部部長の発案のもとで作成することになった。

2. 単元評価テストとは何か

平成27年度の国語部の研究主題は、「生きてはたらく言語力の育成をめざした国語科学習指導（第7年次）～実生活へつなげる言語活動の実践・評価・開発～」となっている。この研究を通して、授業レベル、単元レベルでの授業改善、単元指導改善を図ることになる。

今回、評価テストに「言語活動例」を取り入れたような形式の問題を作成、活用することで、国語科のさらなる授業改善が期待できる。

評価テストを新たに作成することで、国語科の意図する国語の力（表現力、理解力、思考力、想像力、言語感覚、国語の力を生活や他の教科に活用する力など）が評価できる。

結果として、しんだんテストや全国学力・学習状況調査の得点アップが期待できると考えた。

3. 従来のテストと単元評価テストの違い

次に、単元評価テスト（以下、新形式テストと記す）と従来の国語テスト（以下、従来

型テストと記す) とは何が違うのかを述べたい。

従来型テストでは、学習した内容を問う問題が多い。教科書に出てきた物語文や説明文に書かれた事柄などを問う問題が多い。違う書き方をすると、教科書に載っている教材以外の問題が出題されることはまずないと考えていただいて間違いはない。この種のテストでは、日々の国語の学習をきちんと受け、漢字の練習や言葉の意味をきちんと理解していれば良い点数が取れるようになっている。しかし、残念なことに、教科書に出てきた内容を問う問題がほとんど全てであるゆえに、この評価テストでよい点が取れているからと言って、国語の力が十分身に付いているかどうかかわからないともいえる。

国語の学習では、みなさんよく御存じのように、何回も読んで慣れてしまうと、内容が理解できるようになる。しかし、初見の問題を見て、内容のあらましを理解し、問われている事柄にきちんと答えることができるとは限らない。

それに対して、新形式テストでは、単元を通してどのような国語力を育てたいのかを考えた上で、子ども達に言語活動を行わせ、それらの言語活動を通して身に付いた国語力を問う問題を出題することになる。当然、扱う文章も教科書の物語文や説明文だけではない。

教科書に出てきた文章によく似た文章も読んで答える設問もあるということである。

では、ここで、従来型のテストと新形式のテストを示し、両者の違いを知ってもらうことにする。

(1) 従来型テストの具体例

東京書籍が作成し、学習の確かめやテストなどに活用するようにと配信されている「問題データベース」の中に、2年生の2月単元「ニャーゴ」に関するテストプリントがある。ここで取り上げるプリントは、従来型テストの一例といえる。

このテストでは、はじめに、「読んで答えましょう。」と記し、物語の最後の場面を載せた後、次のような設問が4つ並んでいる。

①「一つじゃ足りないね」とありますが、何が足りないと言っているのですか。(記述：もも)

②「ねこは、大きなためいきを一つつきました」とありますが、このときのねこのようすを一つえらんで、○をつけましょう。(3択：子ねずみたちのやさしさに心をうごかされている。)

③「ももをかかえて」とありますが、ねこは、ももをいくつかかかえていますか。(記述：四つ)

④「ニャーゴ」とありますが、このことばであらわしたものを一つえらんで、○をつけましょう。(3択：またももをとりに行こう。)

ここで取り上げたように従来型のテストでは、教材文を読み、設問を読むと答えられる問題が多い。当然、家庭や学校で音読をたくさん行い、授業をきちんと聞いた者がきちんと点を取ることでできる問題になっている。

(2) 新形式テストの具体例

では、次に、国語部作成の単元評価テストはどのようなになっているのか紹介したい。

① 学習場面の設定

ニャーゴの作者は、「おまえうまそうだな」という絵本も書いている。

そこで、新形式テストでは、次のような場面設定から始まっている。

「ニャーゴ」の学しゅうをおえたかんたさんたちは、作しゃのみやにしたつやさんの書いた「おまえうまそうだな」という本を読むことにしました。つぎの文は、「おまえうまそうだな」に書かれている文しょうです。よく読んで、あとの問いに答えましょう。

このような場面設定にしているのには、いくつか意図がある。

1つ目は、小学校6年生や中学校3年生で行う全国学力・学習状況調査の形式を踏まえ

ている。全国学力・学習状況調査では、言語活動を行う必要感を子どもに実感させる意図もあり、大設問ごとに、明確な学習場面を明記し、何のために言語活動を行うのが明確にした上で、設問を行っている。

2つ目は、この新形式テストを行った学級の担任の先生に、このような意図で単元を構成し、日々の授業を行ったうえで、このテストを受けさせてもらっているかを問うことである。

従来型テストでは、教科書に載っている教材（物語文や説明文）を読めば読むだけ、教材の理解度が増し、テストでよい成績がとれることになる。

しかし、先程も述べたように、いくら同じ教材を何回も何回も憶えるぐらい読んだからと言って、新しい教材を読んで、あらましを理解する能力が育つとは限らない。

従来型の授業の方法を改善し、教科書に出てきた教材に関連する本や図書を並行して読んだり、同じ作者の本や図書を読んだりして、できるだけたくさん本や図書に触れることである。

従来型の3分～15分程度で一読できる教材だけを繰り返し繰り返し、数時間から十数時間かけて読んだり書いたりする学習から、教材の幅を教科書に限定せず、もっと広げて、明確な単元のめあてとねらいを絞って、言語活動を行い、言語力が身に付くような学習を意図的に行う必要がある。

従来型の学習の仕方を大きく変換し、授業改善を行った方がよい点数が取れることになるだろう、という思いがある。

② 並行読書を意図した設問

設問一の1は次のようになっている。

1. 「おまえ うまそうだな。」には、二つのいみがあります。ティラノサウルスの考えているいみと、アンキロサウルスの考えているいみを書きましょう。

・ティラノサウルスの考えているいみ

(おまえ、おいしそうだな。たべたら、うまいだろうな。など)

・アンキロサウルスの考えているいみ

(おまえの名前は、「うまそう」だな。おまえは、「うまそう」という名前だな。など)

「ニャーゴ」という物語文は、ねずみを食べようとするねこが、ねこのことを仲間だと慕う子ねずみの優しさにひかれ、最後まで食べられないお話である。

今回、テストに取り上げた「おまえうまそうだな」というお話も、草食動物の赤ちゃんが、肉食恐竜に「お前うまそうだな」と言われ、美味しそうだという肉食恐竜の意図を「自分の名前を『うまそう』だと言ってくれたので、お父さん」だと勘違いして慕う草食恐竜と慕われて戸惑う肉食恐竜との交流を描いたお話である。

同じ作者の書いたよく似た内容のお話なので、学級で並行して読ませるのに適したお話である。

単元に入る前に評価テストの内容を確かめておく先生方も多いと考える。単元の学習に入る前にこのテストを見た先生は、この教材にも触れさせておく方がよいことに気づくだろう。

子ども達に読書力をつける一番の早道は、たくさん読書させることである。よく似たお話をたくさん読むことで、1つの物語を繰り返し読むだけでは決して身に付かない、物語を構成するいくつかの枠組みを理解することができる子どもが増えるのではないかと考える。

また、設問4は、次のようになっている。

4. かんたさんたちは、「ニャーゴ」と「おまえうまそうだな」をくらべながら読みました。気づいたことをノートにまとめました。

あっているものに○、まちがっているものに×を書きましょう。

() どちらの絵本もいったことばが

ちがういみでつたわる。

() 絵本のだいたいがかんちがいされたことばになっている。

() どちらのお話もあいてをたべようとしている。

() 「ニャーゴ」も「おまえうまそうだな」もさいごにはたべられてしまう。

読書のよさの一つに、1つの物語を読んだだけでは、わからないことでも、2つの教材を比べたり並行したりして読むことで理解できることが増える。

今あげたように、新形式テストでは、授業改善を図り、国語の力を高めることをねらいとした。

新形式の問題でよい点がとれるように、大阪市の多くの学校で、授業改善を行い、子どもに国語の力が身につくことを大いに期待している。

4. 評価テスト作成で用いた手だて

今回の評価テスト作成に向けて、教頭職でありながら、実際に新形式テストを作成いただく国語部の先生方に対して、手助けできる方法をいくつか考えた。

(ここからは、新形式の問題を作成する先生方のことを「作成者」、作られた問題を見て、改善案を提示したり、代案を示したりする私のことを「助言者」と記す。)

次の3つである。

A スキップメールを使って、作成者全員に同じ内容を送付する。

B 評価問題に対してコメントを書き、作施者全員に送付する。

C 作成者とできた問題を使って、やりとりする。

(1) スキップメールの活用

スキップメールのよさは、全員に一斉に配信できることである。同じ内容を関係者全員に送付できるだけでなく、送付した人物がメールを読んでいるかどうかを送信者はチェッ

クできる。何日も見ていないメンバーには、学校に連絡して、スキップメールを見るように、伝言をお願いすることもできる。

今回、新形式テスト作成にあたって、最初に簡単なガイダンスを行ったが、後は、テスト作成者の先生方の努力に負う部分が多かった。従来とは、少し考え方の違う問題作成に戸惑う方や、どのようにすればよいのか迷われる方が多かった。そこで、作成者全員に何回かメールをすることにした。

例えば、以下のような内容である。

◎ 問題作成に関して考慮してほしいこと

- ・ 「教科書のでびき」をうまく活用して問題をつくってください。

- ・ 問題例は、「ことばの授業」の堀江先生の文章にたくさん載っています。特に自分の学年の評価問題や、よく似た領域の問題は参考にしてください。

- ・ 繰り返しになりますが、授業の改善が進むように、日常生活や他の教科の学習に活用できる国語科の評価問題、言語活動例を取り入れた評価問題を考えてください。

- ・ 丸山小学校の山下教頭先生から次のような話をお聞きしました。全国学力・学習状況調査の国語のプレテストで次のようなローマ字の問題が出たそうです。

ひとみさんは、水族館に行きました。水槽の中にいる生き物の名前を知りたかったので、掲示物をみました。そこには、「鰐」と漢字で書いてありました。読めないのになんて書いてあるのかな、と思っていると、漢字の横にローマ字で「KAWAUSO」と書いてありました。この動物の名前は何かでしょうか。

このように、単にローマ字を覚えるのをめざす学習ではなく、ローマ字は生活で生かせるということをめざした学習に取り組ませることが大切だろうとのお話でした。

- ・ 教科書の教材だけで問題を作るのではなく、他の文章を使って問題を作ってもらって

もよいのですが、著作権の関係があります。教科書に載っている文章で、作者名がないものは、教科書会社の編集部が書いていますので、著作権の問題は簡単に片付くと思います。「新美南吉」さんや「夏目漱石」さんのように亡くなってから50年が過ぎ著作権がなくなり、「青空文庫」などに載っている作品も扱いやすいと思います。

このように、必要な情報を伝えることで、ある程度、作成者並びに助言者とで共通理解できる部分も増えたのではないかと考えた。

（２）コメントの交流

国語部の経験の差や、問題にしやすそうな単元であるかどうかなど、様々な理由で、作成者が、同時期に問題を作成して送ってくるわけではなかったのも、送られた問題作成に対して、送っていただいた作成者に、改善すべき内容や問題作りのポイントなどをコメントとして返した。同時に問題を早い段階で送っていただいた作成者をお願いして、全員に問題と問題に対するコメントを付けて返すことにした。

多くの作成者のみなさんは、担任をしていたし、問題を見せていただく助言者も教頭だったので、具体例を示したり代案を示したりする時間が十分に取りにくい状況であった。そこで、問題作成に対してコメントを付けて返し、そのコメントを全員に送付することで、他の問題作成者の方も、問題を作るポイントなどが交流できるのではないかと考えた。

文字のよさは繰り返し何回も読み返すことができることであり、問題作成者全員に同じ内容の伝えたい内容を同時に送ることができることである。コメントをつけて返す方法は、一定のよさがあったと考える。しかし、問題を見せていただく助言者側の一方的な思いを書くことになるので、問題作成者の問題作成の意図や問題作成への戸惑い、悩みなどを十分に理解し、適切な助言を伝えることができなかった部分もあるのではないかと考える。

（３）できた問題を使った交流

そこで、できあがった問題をもとに、問題作成者と具体的なやりとりをする方法も取り入れた。そうすることで、問題作成者に問題作成の意図を尋ねたり、さらなる質問に答えたりすることができるからである。

直接会話をすることで、問題作成の意図を尋ねることができたし、こちらの伝えたいことを相手がわかるまで、具体例を変えながら説明することもできた。決して十分な説明や適切な代案が示せたわけではなかったが、直接話をするすることで、問題作成場面での戸惑いや悩みに対して、具体例を示してお伝えすることができたのではないかと考える。

おわりに

単元評価テストを大阪市の多くの学校で活用いただき、子どもたちの国語の力が高まることを願っている。今回、国語部のたくさんのみなさまや東京書籍の関係者のみなさまのご協力をいただき、単元評価テストを作成し、各校に配ることができた。

今後は、実際に単元評価テストを活用いただき、活用してみて不備に感じたことや改善した方がよいと思ったことなどの意見や感想を国語部の先生方や大阪市の先生方からいただき、それをもとに、単元評価テストに修正を加えてよりよいものにしていきたい。また、単元評価テストが解けるような十分な国語力を育てることができるような具体的な授業改善の方法を示していきたい。

編集の遅れや著作権などの関係などで、お約束の時期より少し遅くなって届けることになったが、関係者の皆様に感謝の気持ちを伝えつつ、本論文を終わりたい。